

ときには、辛口

3

◆“学力の低下”——何故？



松本道介
Michisuke Matsumoto

冬休み前最後の授業で一年生のクラスにアンケートを試みた。私は授業のさいあまり出席をとらないし、とるときも五十人くらいのクラスでは出席票をくばって名前を書きこんでもらうことにしている。

しかしその日は名前だけではつまらない気がしたので、急に思い立って小さな紙片をくばり、名前と番号のほかに「学力が低下したというが、何故だと思うか？」簡単に答えてほしいとたのんでみた。

この問題は新聞などでよく議論されているし、そこでコメントを求められる大学の先生や教育評論家の多くは文部省のはじめたゆ

とり教育への批判に終始するのが常である。だが、そうした論議を当の高校生や小中学生はどう見ているのか、彼らの意見が述べられるのを見たことがない。かねがね若い世代の言いぶんを聞きたいと思っていたので、このあいだまで高校生だった大学一年生にアンケートを試みたのである。

“学力低下”——体験世代の慧眼

出席をとるついでの簡単なアンケートだったから、ゆとり教育のせいだとか、テレビゲームをはじめ面白いものがありすぎるからとか、短い一行、二行の答えが並ぶものと思っ

ていた。ところがなんとほとんどの学生が紙いっぱい使って十行、二十行の文章を書いてくれた。

読んでみると、ゆとり教育のせいで学力が低下したというたぐいの型通りの意見はごく少ない。ゆとり教育に触れてはいてもそれ以上にゆとり教育を生み出した背景の方に目を届かせている。私もかねがねゆとり教育は学力低下の結果だと思っていた。つまり、学力が低下してきたからこそ、円周率3・14を3として教えざるをえなくなつたと思っていたのだが、学生たちもほとんどがその方向で考え、ゆとり教育の背後にあるもつともっと大きな問題に目を向けていることに私は感心した。これだけ冷静に自分の育ってきた環境を見つめている学生の多いのに驚くとともに、こうした学生を持っていることへの誇りをさえ覚えた。

「満ちたりて、勉強の気力など…」

学力の低下を身をもって経験した世代として学生たちは書いている。へ電卓にたよる人間がふえ、頭をつかって考える習慣が減ったから、へマニュアルがありすぎ、試行錯誤

をくりかえして、答えを見つけられる機会がない、
〈すべてにみちたりてハングリー精神皆無
一億総上流とも言われる日本で勉強をする
気力などわいてくるはずがない〉〈学力など
下がったっていいではないか、計算だつて記
憶だつてコンピューターがやつてくれるのだ
から〉等々、学力低下の理由説明から便利す
ぎる現代社会への批判にまで及ぶ。

さらには自分たちの将来にも目を向けて
〈学力など身につけたところで将来いい就職
ができる保証などないではないか〉、〈むしろ
手を用いる職業の方がたしからしい〉、〈何を
もつていい大学というのか、何をもつていい
会社というのかわからなくなつてしまった〉
と疑問や不安ものぞかせる。

ほぼ五十年前の私の大学一年の頃となんた
る違いだろう。当時の私はまだ、うぶで卒業後
の就職のことなど考えたこともなかった。そ
れに私のような怠け者でさえ多少の向学心は
あったのか、社会へ出る前に大学で学ぶこと
はいっぱいあるような気がしていた。

しかし今の大学一年生は大学で学ぶことへ
の期待などほとんどないかに見える。少くも
も大学を就職前の通過点としてわり切つてい

るし、一年生ですでに塾教師のアルバイトを
つとめる学生も少なからずいて、すでに教師
の目で小中学生の教育問題を考えていたりす
る。

教師は一体何を教えられるのか

昔にくらべるとはるかに大人であり、老成
している感じさえある学生たちに、教師たる
私はいったい何を教えられるのか。たんに
教えるだけでいいならいくらでも教えること
はできるが、そんな勉強をしてなんの役に立
つのかと問い返されれば教師は口をつぐむし
かない。おそらく今後の教師は学生に教えな
がら、彼らが将来どのように生きていけばい
いのかをいっしょに考えなければならぬとい
だろう。あるいはもしかすると学生から多く
を教えてもらわなければならぬのかもしれない。

というのも老教師たる私は生涯のほとんど
をいわゆる高度成長期のなかで過してきたか
らである。その時期には経済から科学、個人
の生活いっさいが上昇の道を歩んでいた。お
そらく小中学生の学力も成長の一途をたどつ
ていたにちがいないし、なんのために勉強す

るのかなどという問いを発する人もいなかっ
たしその必要もなかった。

それがバブル崩壊によつて高度成長期が終
り経済が下降線をたどり出すとすべてがこれ
にならつて下がり出す、おそらく小中学生の
学力もその流れのなかで下がり出したのだろ
う。学者や評論家は文部省や親や教師に罪を
押しつけようとするが、これは文明の本質に
かかわる問題にちがいない。ありとあらゆる
ものが原因となり結果となつて学力のみなら
ず経済から学問から生活のいっさいを下降に
向わせているのであろうし、少くともこれか
ら「びきしめ教育」などおこなつてみたところ
でなんの効果もあがらないにきまつている。
では、どうすればいいのか。それはこの上
もない難問があり、およそ答えらしきものを
出すことはできないが、今の私にしろうじて
言えるのは、富や強さや大きさ、速さそして
便利快適ばかりを指してまっしぐらに進ん
できた近代文明の価値観を見直していくこと
であり、そうした価値からはずれた「スロー」
や「アナログ」、清貧や不便といったもの
の意味を模索してみることである。

(文学部教授)